

# 中国怪奇小説集

異聞総録・其他

岡本綺堂

青空文庫



## 第九の男は語る。

「わたくしは宋代の怪談総まくりというような役割でございますが、これも唐に劣らない大役でございます。就いてはまず『異聞総録』を土台にいたしまして、それから他の小説のお話を少々ばかり紹介いたしたいと存じます。この『異聞総録』はまったく異聞に富んだ面白いものでありますが、作者の名が伝わって居りません。専門の研究家のあいだにはすでにお判りになっているのかも知れませんが、せんがくかぶん浅学寡聞のわれわれはやはり作者不詳と申すのほかはございませんから、左様御承知をねがいます」

## 竹人、木馬

宋の紹興十年、兩淮地方の兵乱がようやく鎮定したので、兵を避けて江南に渡っていた人びともだんだんに故郷へ立ち戻ることになった。そのなかで山陽地方の士人ふたりも帰郷の途中、淮揚を通過して北門外に宿ろうとすると、宿の主人が丁寧<sup>に</sup>答えた。

「わたくしもこの宿舎を持っているのですから、お客人を長くお泊め申して置きたいのはやまやまですが、あなた方に対しては正直に申し上げなければなりません。何分にも軍のあとで、ここらも荒れ切っているので、家はきたなくなっているばかりか、盜賊

どもがしきりに徘徊するので困ります。ここから十里ばかり先りよに呂という家がありまして、そこは閑静で綺麗な上に、賊をふせぐ用心も出来ていますから、そこへ行ってお泊まりなさるがよろしゅうございます。わたくしの家から僕しもべや馬を添えてお送り申させますから」

ふたりは素直にその忠告を肯きいた。殊に呂氏の家というのもかねて知っているので、それではすぐに行こうと出かけると、主人は慇懃いんぎんに別れを告げた。

「どうぞお帰りにもお立ち寄りください。もう日が暮れましたから、馬にお召しなさい」

主人は達者そうな僕二人に二匹の馬をひかせて送らせた。途中

も無事で、まだ夜半にならないうちにかの呂氏の家にゆき着くと、家の者は出で迎えて不思議そうに言った。

「近頃この辺にはいろいろの化け物が出るといふのに、どうして夜歩きをなすつたのです」

二人はここへ来たわけを説明して、鞍から降り立とうとすると、馬も僕も突つ立つたままあかりで動かない。

すぐに飛び降りて燈火あかりに照らしてみると、人も馬も姿は消えて、そこに立っているのは、二本の枯れた太い竹と、二脚の木の腰掛けと唯それだけであつた。竹も木も打ち砕いて焚かれてしまつたが、別に怪しいこともなかつた。

それから五、六カ月の後、ふたたび先度の北門外へ行くと、そ

こは空き家で、主人らしい者は住んでいなかった。

(異聞総録)

## 疫鬼

紹興三十一年、湖州の漁師の呉ごいちいん一因いんという男が魚を捕とりに出  
て、新城柵界の河岸に舟をつないでいた。

岸の上には民家がある。夜ふけて、その岸の上で話し声がきこ  
えた。暗いので、人の形はみえないが、その声だけは舟にいる呉  
の耳にも洩もれた。

「おれ達も随分この家うちに長くいたから、そろそろ立ち去ろうで

はないか。いつその舟に乗って行つてはどうだな」

「これは漁師の舟だ。おまけにほか土地の人間だからいけない。あしたになると、東南の方角から大きい船が来る。その船には二つの紅い食器と、五つ六つの酒さか瓶がめを乗せているはずだから、それに乗り込んで行くでしょう。その家はここの親類で、なかなか金持らしいから、あすこへ転げ込めば間違いなしだ」

「そうだ、そうだ」

それぎりで声はやんだ。

呉はあくる日、上陸してその民家をたずねると、家には疫病にかかっている者があつて、この頃だんだんに快方に向かつているという話を聞かされたので、ゆうべ語っていた者どもは疫鬼えききの群



れであつたことを初めて覚さとつた。そこで、舟を東南五、六里の岸に移して、果たしてかれらの言うような船が来るかどうかと窺つていると、やがて一艘の小舟がくだつて来た。舟に積んでいる物も鬼の話と符合しているので、呉は急に呼びとめて注意すると、舟の人びともおどろいた。

「おまえさんはいいことを教えて下すつた。それはわたしの婿の家で、これから見舞いながら食い物を持って行ってやろうと思つていたところでした。なんにも知らずに行つたが最後、やくびようが疫病やくびがこつちへ乗り込んで来て、どんな目に逢うか判らなかつたのです」

積んで来た酒や肉を彼に馳走して、舟は早々に漕ぎ戻した。

## 亡妻

(同上)

宋の大観たいかん年中、都の医官の耿愚こうぐがひとりの妾を買った。女は容貌きりようも好く、人間もなかなか利口であるので、主人の耿にも眼をかけられて、無事に一年余を送った。

ある日のこと、その女が門前に立っていると、一人の小児が通りかかって、阿母おつかさんと声をかけて取りすぎると、女もその頭を撫でて可愛がつてやった。小児は家へ帰って、その父に訴えた。

「阿母さんはこういう所にいるよ」

しかしその母というのは一年前余に死んでいるので、父はわが子の報告をうたがった。しかしその話を聞くと、まんざら嘘でもないらしいので、ともかくも念のためにその埋葬地を調べると、盗賊のために発あばかかれたと見えて、その死骸が紛失しているのを発見した。そこで、その児を案内者にして、耿の家の近所へ行つて聞きあわせると、その女は亡き妻と同名であることが判わかつた。

もう疑うところはないと、父は行商に姿をかえ、その近所の往來を徘徊して、女の出入りを窺っているうちに、ある時あたかも彼女に出逢つた。それはまさしく自分の妻であつた。女も自分の夫を見識っていた。不思議の対面に、その場はたがいに泣いて別れたが、それが早くも主人の耳に入つて、耿は女を詮議すると、

彼女は明らかに答えた。

「あの人はわたくしの夫で、あの児はわたくしの子でございます」  
「嘘をつけ」と、耿は怒った。「去年おまえを買ったときには、ちやんと桂庵けいあんの手を経ているのだ。おまえに夫のないということとは、証文面にも書いてあるではないか」

女は密夫を作つて、それを先夫と詐いつわるのであると、耿は一途いちずに信じているので、彼女をその夫に引き渡すことを堅く拒こばんだ。こうなると、訴訟沙汰になるのほかはない。役人はまず女を取調べると、彼女はこう言うのである。

「わたくしも確かなことは覚えません。ただ、ぼんやりと歩きつづけて、一つの橋のあるところまで行きましたが、路に迷つて方

角が判らなくなつてしまいました。そこへ桂庵のお婆さんが来て、わたくしを連れて行つてくれましたが、ただ遊んでいては食べる事が出来ませんから、お婆さんと相談してこの家へ売ら<sup>うち</sup>れて来ることになつたのでございます」

さらに桂庵婆をよび出して取調べると、その申し立てもほぼ同じようなもので、<sup>こうびきよう</sup>広備橋のほりに迷つてゐる女をみて、自分の家へ連れて来たのであると言つた。なにしろ死んだ女が生き返つてかういふことになつたのであるから、役人もその裁判に困つて、先夫から現在の主人に相当の値<sup>あた</sup>いを支払つた上で、自分の妻を引き取るがよかろうと言ひ聞かせたが、耿の方が承知しない。いつたん買ひ取つた以上は、その女を他人に譲ることは出来ない。

というので、さらに御史台ぎよしだいに訴え出たが、ここでも容易に判決をくだけしかねて、かれこれ暇取ひまどつているうちに、問題の女は又もや姿を消してしまった。

相手が失せたので、この訴訟も自然に沙汰やみとなったが、女のゆくえは遂に判らなかつた。それから一年を過ぎずして、主人の耿も死んだ。

(同上)

### 孟蘭盆

撫州ぶの南門、黄柏路こうはくろというところに詹六たん、詹七すえという兄弟があつて、帛きぬを売るのを渡世としていた。又その季すえの弟があつて、

家内では彼を小<sup>しょう</sup>哥<sup>か</sup>と呼んでいたが、小<sup>しょう</sup>哥<sup>か</sup>は若い者の習<sup>な</sup>い、賭<sup>と</sup>博<sup>ぱく</sup>にふけて家の錢<sup>ぜに</sup>を使い込んだので、兄<sup>あに</sup>たちにひどい目に逢<sup>あ</sup>わされるのを畏<sup>おそ</sup>れて、どこへか姿をくらました。

彼はそれぎり音信不通であるので、母はしきりに案<sup>あ</sup>じていたが、占<sup>う</sup>らな<sup>な</sup>し<sup>しゃ</sup>や占<sup>う</sup>い<sup>い</sup>者<sup>しや</sup>などに見てもらっても、いつも凶と判断されるので、もうこの世にはいないものと諦<sup>あきら</sup>めるよりほかはなかつた。そのうちに七月が来て、盂<sup>う</sup>蘭<sup>らん</sup>盆<sup>ぼん</sup>会<sup>え</sup>の前夜となつたので、詹<sup>せん</sup>の家では燈籠<sup>とうろう</sup>をかけて紙<sup>し</sup>錢<sup>せん</sup>を供<sup>く</sup>えた。紙<sup>し</sup>錢<sup>せん</sup>は紙<sup>かみ</sup>をきつて錢<sup>ぜに</sup>の形<sup>かたち</sup>を作<sup>つく</sup>つたもので、亡<sup>な</sup>者の冥<sup>めい</sup>福<sup>ふく</sup>を祈<sup>いの</sup>るがために焚<sup>や</sup>いて祭<sup>まつ</sup>るのである。

日が暮<sup>く</sup>れて、あたりが暗<sup>く</sup>くなると、表<sup>うら</sup>で幽<sup>かす</sup>かに溜<sup>ため</sup>め息<sup>いき</sup>をするよ  
うな声<sup>こゑ</sup>がきこえた。

「ああ、小哥はほんとうに死んだのだ」と、母は声をうるませた。孟蘭盆で、その幽霊が戻つて来たのだ。

母はそこにある一枚の紙銭を取りながら、闇にむかつて言い聞かせた。

「もし本当に小哥が戻つて来たのなら、わたしの手からこの銭をとつてごらん。きつとおまえの追善供養ついでんをしてあげるよ」

やがて陰風がそよそよと吹いて来て、その紙銭をとつてみせたので、母も兄弟も今更のように声をあげて泣いた。早速に僧を呼んで、読経どぎようその他の供養を営んでもらつて、いよいよ死んだものと思ひ切つていると、それから五、六カ月の後に、かの小哥のすがたが家の前に飄然と現われたので、家内の者は又おどろいた。



「この幽霊め、迷つて来たか」

総領の兄は刀をふりまわして逐おい出そうとするのを、次の兄が  
さえぎった。

「まあ、待ちなさい。よく正体を見とどけてからのことだ」

だんだんに詮議すると、小哥は死んだのではなかった。彼は実  
家を出しゅっぽん奔して、宜黄ぎこうというところへ行つて或る家に雇われて  
いたが、やはり実家が恋しいので、もう余ほとぼり焰ほの冷さめた頃だろう  
と、のそのそ帰つて来たのであることが判わかつた。して見ると、前  
の夜の出来事は、無縁の鬼がこの一家をあざむいて、自分の供養  
を求めたのであつたらしい。

(同上)

## 義犬

せい  
青州に朱老人しゆといふのがあつて、薬を売るのを家業とし、常に妻と妾と犬とを連れて、南康県付近を往来していた。

紹興二十七年四月、黄岡こうこうの旅館にある時、近所の村民が迎いに来て、母が病中であるからその脈を見た上で相当の薬をあたえてくれと頼んだ。ここから五、六里の所だといふので、朱老人は今夜そこへ一泊するつもりで、妻妾と犬とを伴つて出てゆくと、途中の森のなかには村民の徒党が待ち伏せをしていて、老人は勿論、あわせて妻妾をも惨殺して、その金かねぶくろ囊や荷物を奪い取つた。

そのなかで、犬は無事に逃げた。彼はその場から主人の実家へ一散に駆け戻つて、しきりに悲しげに吠え立てるのみか、何事をか訴えるように爪で地を掻きむしつた。家の者もそれを怪しんで、県の役所へ牽<sup>ひ</sup>いてゆくと、犬はその庭に伏して又しきりに吠えつづけた。その様子をみて、役人もさとつた。

「もしやお前の主人が何者にか殺されたのではないか。それならば案内しろ」

言い聞かされて、犬はすぐに先に立つて出た。役人らもそのあとに付いてゆくと、犬はかの森のなかへ案内して、三人の死骸の埋めである場所を教えた。

「死骸はこれで判つたが、賊のありかはどこだ」

犬は又かれらを村民の住み家に案内したので、賊の一党はみな召捕られた。

(同上)

### 窓から手

少保しょうほの馬亮公ばりようこうがまだ若いときに、燈下で書を読んでいると、突然に扇のような大きい手が窓からぬつと出た。公は自若じじやくとして書を読みつづけていると、その手はいつか去った。

その次の夜にも、又もや同じような手が出たので、公は雌黄しおうの水を筆にひたして、その手に大きく自分の書き判を書くとき、外では手を引っ込めることが出来なくなつたらしく、俄かに大きい声

で呼んだ。

「早く洗ってくれ、洗ってくれ、さもないと、おまえの為にならないぞ」

公はかまわずに寢床にのぼると、外では焦れて怒って、しきりに洗ってくれ、洗ってくれと叫んでいたが、公はやはりそのままに打ち捨てて置くと、暁け方になるにしたがって、外の声は次第に弱って来た。

「あなたは今に偉くなる人ですから、ちよつと試してみただけの事です。わたしをこんな目に逢わせるのは、あんまりひどい。晋の温嶠が牛渚をうかがって禍いを招いたためしもありま

す。もういい加減にして免してください」

化け物のいうにも一応の理屈はあるときとつて、公は水をもつて洗つてやると、その手はだんだんに縮んで消え失せた。

公は果たして後に少保の高官に立身したのであつた。

(同上)

## 張鬼子

洪州の州学しゅうがくせい正せいを勤めてちよういる張ちようという男は、元来刻薄こくはくの生まれ付きである上に、年を取るに連れてそれがいよいよ激しくなつて、生徒が休暇をくれろと願つても容易に許さない。学官が五日の休暇をあたえると、張はそれを三日に改め、三日の休暇をあ

たえると二日に改めるといふふうで、万事が皆その流儀であるから、諸生徒から常に怨まれていた。

その土地に張鬼子ちようきしという男があつた。彼はその風貌が鬼によく似ているので、鬼子という渾名あだなを取つたのである。

そこで、諸生徒は彼を鬼に仕立てて、意地の悪い張学正をおどしてやろうと思ひ立つて、その相談を持ち込むと、彼は慨然がいぜんとして引き受けた。

「よろしい。承知しました。しかし無暗に鬼の真似をして見せたところで、先生は驚きますまい。冥府の役人からかういふ差紙さしがみを貰つて来たのだぞといつて、眼のさきへ突き付けたら、先生もおそらく真物ほんものだと思つて驚くでしょう。それを付け込んで、今

後は生徒を可愛がつてやれと言ひ聞かせます」

しかし冥府から渡される差紙などというものの書式しよしきを誰も知らなかった。

「いや、それはわたしが曾かつて見たことがあります」

張は紙を貰つて、それに白礬はくはんで何か細かい字を書いた。用意はすべて整つて、日の暮れるのを待っていると、一方の張先生は例のごとく生徒をあつめて、夜学の勉強を監督していた。

州の学舎は日が暮れると必ず門を閉じるので、生徒は隙すきをみてそつと門をあけて、かの張鬼子を誘い込む約束になっていた。その門をまだ明けないうちに、張鬼子はどこかの隙間から入り込んで来て、教室の前にぬつと突つ立ったので、人びとはすこしく驚



いた。

「畜生、貴様はなんだ」と、張先生は怒って罵った。「きつと生徒らにたのまれて、おれをおどしに来たのだらう。その手を食うものか」

「いや、おどしでない」と、張鬼子は笑った。「おれは閻羅王えんらおうの差紙を持って来たのだ。嘘だと思ふなら、これを見ろ」

かねて打ち合わせてある筋書の通りに、かれはかの差紙を突き出したので、先生はそれを受取って、まだしまいまで読み切らないうちに、かれはたちまちその被り物を取り除けると、そのひたいには大きい二本の角があらわれた。先生はおどろき叫んで仆たおれた。

張は庭に出て、人びとに言った。

「みなさんは冗談にわたしを張鬼子と呼んでいられたが、実は私はほんとうの鬼です。牛頭ごづの獄卒です。先年、閻羅王の命を受けて、張先生を捕えに来たのですが、その途中で水を渡るときに、誤まって差紙を落してしまったので役目を果たすことも出来ず、むなしく帰ればどんな罰こらむを蒙るかも知れないので、あしかけ二十年の間、ここにさまよっていたのですが、今度みなさん方のお蔭で飯かろうを弄ろうして真しんとなし、無事に使命おんを勤め負おせることが出来ました。ありがとうございます」

かれは丁寧ていねいに挨拶して、どこへか消えてしまったので、人びとはただ驚き呆れるばかりであった。張先生は仆れたままで再び生

きなかつた。

(同上)

## 両面銭

南方では神鬼をたつとぶ習慣がある。狄青<sup>てきせい</sup>が儂智高<sup>のうちこう</sup>を征伐する時、大兵が桂林の南に出ると、路ばたに大きい廟があつて、すこぶる靈異ありと伝えられていた。

將軍の狄青は軍をとどめて、この廟に祈つた。

「軍の勝負はあらかじめ判りません。就いてはここに百文の銭<sup>ぜに</sup>をとつて神に誓います。もしこの軍が大勝利であるならば、銭<sup>おもて</sup>の面がみな出るように願います」

左右の者がさえぎつて諫めた。

「もし思い通りに銭の面が出ない時には、士気を沮める虞れがあります」

狄青は肯かないで神前に進んだ。万人が眼をあつめて眺めていると、やがて狄青は手に百銭をつかんで投げた。どの銭もみな紅い面が出たのを見るや、全軍はどつと歡び叫んで、その声はあたりの林野を震わした。狄青もまた大いに喜んだ。

彼は左右の者に命じて、百本の釘を取り来たらせ、一々その銭を地面に打付けさせた。そうして、青い紗の籠をもってそれを掩い、かれ自身で封印した。

「凱旋の節、神にお礼を申してこの銭を取ることにする」

それから兵を進めてまず崑崙関こんろんかんを破り、さらに智高ちこうを破り、  
 邕管ゆうかんを平らげ、凱旋の時にかの廟に参拝して、曩さきに投げた錢を  
 取つて見せると、その錢はみな両面おもてであつた。(鉄圀山叢談)

## 古御所

洛陽らくようの御所は隋唐五代の故宮こきゆうである。その後にもここに都  
 するの議がおこつて、宋の太祖の開宝かいほう末年に一度行幸の事があ  
 ったが、何分にも古御所ふるごしよに怪異が多く、又その上に霖雨ながあめに逢  
 い、旱ひでりを禱いのつてむなしく歸つた。

それから宣和年間せんなに至るまで年を重ねること百五十、故宮はい

よいよ荒れに荒れて、金鑾殿きんらんてんのうしろから奥へは白昼も立ち入る者がないうようになった。立ち入ればとかくに怪異を見るのである。大きな熊蜂や蟒蛇うわばみも棲んでゐる。さらに怪しいのは、夜も昼も音楽の声、歌う声、哭なく声などの絶えないことである。

宣和の末に、呉本ごほんという監官があつた。彼は武人の勇氣にまかせて、何事をも畏れ憚おそはばからず、夏の日さるに宮前の廊下に涼んでいて、申さるの刻（午後三時—五時）を過ぐるに至つた。まだ暗くはならぬいが、場所が場所であるので、従者は恐れて早く帰ろうと催促したが、呉は平気で動かなかつた。

たちまち警蹕けいひつの声が内からきこえて、衛従の者が紅い絹をかけた金籠の燭を執ること数十対ついで、そのなかに黄いろい衣服を着け

て、帝王の如くに見ゆる男一人、その胸のあたりにはなまなましい血を流していた。そのほかにも随従の者大勢、列を正しく廊下づたいに奥殿へ徐々しずしずと練つて行つた。

呉と従者は急いで戸の内に避けたが、最後の衛士は呉がここに涼んでいて行列の妨げをなしたのを怒つたらしく、その臥榻がとうの足をとつて倒すと、榻は石いしが塼わらをうがって地中にめり込んだ。衛士らはそれから他の宮殿へむかつたかと思つと、その姿は消えた。呉もこれを見て大いにおどろいた。その以来、彼は決してこの古御所に寝泊まりなどをしなかつた。彼は自分の目撃したところを絵にかいて、大勢の人に示すと、洛陽の識者は評して「これは必ず唐の昭宗しょうそうであろう」と言つた。

唐の昭宗皇帝は英主であつたが、晩唐の国勢振わず、この洛陽で叛臣朱全忠しゅぜんちゆうのために弑しいせられたのである。  
 (同上)

### 我来也

京城の繁華の地区には窃盜が極めて多く、その出沒すこぶる巧妙で、なかなか根絶することは出来ないのである。

趙尚書ちやうしやうしよが臨安りんあんの尹いんであつた時、奇怪の賊があらわれた。

彼は人家に入つて賊を働はたらき、必ず白粉をもつてその門や壁に「我が来也らいや」の三字を題して去るのであつた。その逮捕甚だ嚴重であつたが、久しいあいだ捕獲することが出来ない。



我来也の名は都鄙とひに喧伝けんでんして、賊を捉えるとはいわず、我来也を捉えるというようになった。

ある日、逮捕の役人が一人の賊を牽ひいて来て、これがすなわち我来也であると申し立てた。すぐに獄屋へ送つて鞫きくもん問したが、彼は我来也でないと言い張るのである。なにぶんにも証拠とすべき贓品ぞうひんがないので、容易に判決をくだすことが出来なかつた。そのあいだに、彼は獄卒にささやいた。

「わたしは盜賊には相違ないが、決して我来也ではありません。しかし斯こうなつたら逃がれる道はないと覚悟していますから、まあいたわあつておくんなさい。そこで、わたしは白金そくばくを宝叔ほうしゆ塔くとうの何階目に隠してありますから、お前さん、取つてお出でな

さい」

しかし塔の上には昇り降りの人が多い。そこに金を隠してあるなどは疑わしい。こいつ、おれを担ぐかつのではないかと思つていと、彼はまた言つた。

「疑わずに行つてごらんなさい。こちらに何かの仏事があるとかいつて、お燈籠に灯を入れて、ひと晩廻り廻つているうちに、うまく取り出して来ればいいのです」

獄卒はその通りにやってみると、果たして金を見いだしたので、大喜びで歸つて来て、あくる朝はひそかに酒と肉とを獄内へ差し入れてやった。それから数日の後、彼はまた言つた。

「わたしはいろいろの道具を瓶かめに入れて、侍郎橋じろうきょうの水のなかに

隠してあります」

「だが、あすこは人足ひとあしの絶えないところだ。どうも取り出すに困る」と、獄卒は言った。

「それはこうするのです。お前さんの家うちの人が竹籃たけかごに着物をたくさん詰め込んで行って、橋の下で洗濯をします。そうして往來のすきをみて、その瓶を籃に入れて、上から洗濯物をかぶせて帰るのです」

獄卒は又その通りにすると、果たして種々の高価の品を見つけ出した。彼はいよいよ喜んで獄内へ酒を贈った。すると、ある夜の二更にこう（午後九時―十一時）に達する頃、賊は又もや獄卒にささやいた。

「わたしは表へちよつと出たいのですが……。四更（午前一時—三時）までには必ず帰ります」

「いけない」と、獄卒もさすがに拒絶した。

「いえ、決してお前さんに迷惑はかけません。万一わたしが帰つて来なければ、お前さんは囚めしゆうど人を取り逃がしたというので流る罪ざいになるかも知れませんが、これまで私のあげた物で不自由なしに暮らして行かれる筈です。もし私の頼みを肯きいてくれなければ、その以上に後悔することが出来るかも知れませんか」

このあいだからの一件を、こいつの口からべらべら喋しゃべられては大変である。獄卒も今さら途方にくれて、よんどころなく彼を出してやったが、どうなることかと案じていると、やがて檐のきの瓦

を踏む音がして、彼は家根やねから飛び下りて来たので、獄卒は先ずほつとして、ふたたび彼に手枷足枷をかけて獄屋のなかに押し込んで置いた。

夜が明けると、昨夜三更、張府に盜賊が忍び入って財物をぬすみ、府門に「我来也」と書いて行つたという報告があつた。

「あぶなくこの裁判を誤まるところであつた。彼が白状しないのも無理はない。我来也はほかにあるのだ」と、役人は言つた。

我来也の疑いを受けた賊は、叩きの刑を受けて境外へ追放された。獄卒は我が家へ帰ると、妻が言つた。

「ゆうべ夜なかに門を叩く者があるので、あなたが歸つたのかと思つて門をあけると、一人の男が、二つの布ぬのぶくろ囊をほうり込ん

で行きました」

そのふくろをあけて見ると、みな金銀の器うつわで、賊は張府で盗んだ品を獄卒に贈ったものと知られた。趙尚書は明察の人物であったが、遂に我来也の奸計さごとを覚さとらなかつたのである。

獄卒はやがて役を罷やめて、ふところ手で一生を安樂に暮らした。その歿後、せがれは家産を守ることが出来ないで全部蕩とうじん尽じん、そのときに初めてこの秘密を他人に洩はらした。

(諧史)

## 海井

華亭かてい県の市中に小道具屋があつた。その店に一つの物、それは

小桶に似て底がなく、竹でもなく、木でもなく、金でもなく、石でもなく、名も知れなければ使い途も知れなかった。店に置くこと数年、誰も見かえる者もなかった。

ある日、商船の老人がそれを見て大いにおどろき、また喜んだ<sup>けしき</sup>気色で、しきりにそれを撫でまわしていたが、やがてその値いを訊いた。道具屋の亭主もぬかりなく、これは何かの用に立つものと<sup>み</sup>見て取って、出たらめに五百<sup>びん</sup>緡と吹かけると、老人は笑って三百緡に負けさせた。その取引きが済んだ後に、亭主は言った。「実はこれは何という物か、わたしも知らないのです。こうして取引きが済んだ以上、決してかれこれは申しませんから、どうぞ教えてください」

「これは世にめずらしい宝だ」と、老人は言った。「その名を海いせい井せいという。普通の航海には飲料として淡水を積んで行くのが習い、しかもこれがあれば心配はない。海の水を汲んで大きいうつわに満々とたたえ、そのなかに海井を置けば、潮水は変じて清い水となる。異国の商人からかねてその話を聞いていたが、わたしも見るのは今が始めて、これが手に入れば、もう占めたものだ」

(癸辛雜識続集)

## 報冤蛇

南なんえつ粵えつの習いとしてこどくじゆそ蠱毒呪詛をたつとび、それに因つて人を殺



し、又それによつて人を救うこともある。もし人を殺そうとして仕損ずる時は、かえつておのれを斃たおすことがある。

かつて南中に遊ぶ人があつて、日盛りを歩いて林の下に休んでいる時、二尺ばかりの青い蛇を見たので、たわむれに杖をもつて撃つと、蛇はそのまま立ち去つた。旅びとはそれから何だか体の工合がよくないように感じられた。

その晩の宿に着くと、旅舎の主人が怪しんで訊いた。

「あなたの面かおには毒氣があらわれているようですが、どうかなさいましたか」

旅人はぼんやりして、なんだか判わからなかつた。

「きよようの道中にどんな事がありましたか」と、主人はまた訊い

た。

旅人はありのままに答えると、主人はうなずいた。

「それはいわゆる『報冤蛇』ほうえんだです。人がそれに手出しをすれば、百里の遠くまでも追つて来て、かならず其の人の心むねを噬かみます。その蛇は今夜きつと来るでしょう」

旅人は懼おそれて救いを求めると、主人は承知して、龕がんのなかに供えてある竹筒を取り出し、押し頂いて彼に授けた。

「構わないから唯ただこれを枕もとにお置きなさい。夜通し燈火あかりをつけて、寝た振りをして待っていて、物音がきこえたらこの筒をお明けなさい」

その通りにして待つていると、果たして夜半に家根瓦のあいだ

で物音がきこえて、やがて何物か几つくえの上に墮おちて来た。竹筒たけとうのなかでもそれに応こたえるように、がさがさいう音がきこえた。そこで、筒をひらくと、一尺ばかりの蜈蚣むかでが這い出して、旅人のからだを三度廻まわつて、また直ぐに几の上に復かえつて、暫くして筒のなかに戻かえつた。それと同時に、旅人は俄かに体力のすこやかになつたのを覺おぼえた。

夜が明けて見ると、きのうの昼間に見た青い蛇がそこに斃たおれていた。旅人は主人の話の嘘でないことを初めてさとつて、あつく礼を述べて立ち去つた。

又こんな話もある。旅人が日暮れて宿に行き着くと、旅舎の主人と息子が客の荷物をじろじろと眺めている。その様子が怪しい

ので、ひそかに主人らの挙動をうかがっている、父子は一幅のさる猴の絵像を取り出して、うやうやしくいの禱っていた。

旅人はしもべ僕に注意して夜もすがら眠らず、劍をひきつけて窺っていると、やがて戸を推してはいって来た物がある。それは一匹の猴で、体は人のように大きかった。劍をぬいて追ひ払うと、猴はしりごみして立ち去った。

暫くして母屋で、主人のな哭く声がきこえた。息子は死んだというのである。

(独醒雜志)

## 紅衣の尼僧

唐とうの宰相の賈耽かたんが朝ちようよりしりぞいて自邸じていに帰ると、急に上東門の番卒を召して、嚴重に言い渡した。

「あしたの午ひるごろ、変った色の人間が門に入ろうとしたら、容赦なく打ち叩け。打ち殺しても差し支えない」

門卒らはかしまつて待っていると、翌日の巳みの刻を過ぎて午うまの刻になった頃、二人の尼僧が東の方角の百歩ほどの所から歩いて来た。別に変ったこともなく、かれらは相前後して門前に近づいた。見ればかれらは紅べ白粉おしろいをつけて、その艷容は娼婦の如くであるのみか、その内服は真っ紅で、下飾りもまた紅かった。

「こんな尼があるものか」と、卒は思った。かれらは棒をもつて滅多めった打ちに打ち据えると、二人の尼僧は脳を傷つけ、血をながし

て、しきりに無罪を泣き叫びながら、引つ返して逃げてゆく。その疾ときこと奔馬の如くであるのを、また追いかけて打ち据えると、かれらは足を傷つけられてさんざんの体ていになつた。それでも百歩以上に及ぶと、その行くえが忽たちまち知れなくなつた。

門卒はそれを賈耽に報告して、他に異色の者を認めず、唯ただかの尼僧の衣服容色が異つているのみであつたと陳述すると、賈は訊いた。

「その二人を打ち殺したか」

脳を傷つけ、足を折り、さんざんの痛い目に逢わせたが、打ち殺すことを得ないでその行くえを見失つたと答えると、賈は嘆息した。

「それでは小さい災いを免かれまい」

その翌日、東市から火事がおこつて百千家を焼いたが、まずそれだけで消し止めた。

(芝田録)

## 画虎

靈池れいち県、洛帶らくたい村に郭二かくじという村民がある。彼が曾かつてこんな話をした。

自分の祖父は医師と卜ほくしや者を業とし、四方の村々から療治うらなや占いに招かれて、ほとんど寸暇すんかもないくらいであつた。彼は孫真そんしん人が赤い虎を従えている図をかかせて、それを町の店なかに懸

けて置くこと数年、だんだん老境に入るにしたがつて、毎日唯ぼんやりと坐つたままで、画えがける虎をじつと見つめていた。

彼は一日でも画ける虎を見なければ楽しまないのであつた。悴や孫たちが城中へ豆や麦を売りに行つて、その帰りに塩や醤油を買つて来る。それについて何か氣に入らない事があると、すぐに怒つて罵つて、時には杖をもつて打ち叩くこともある。そんな時でも画ける虎を見れば、たちまちに機嫌が直つて、なにもかも忘れてしまふのである。

療治に招かれて病家へ行つても、そこに画虎がこの軸でもあれば、いい心持になつて熱心に療治するのであつた。したがつて、親戚などの付き合いからも、画虎の軸や屏風を贈つて来るのを例とす



るようになった。こうして、幾年を<sup>ふ</sup>経るあいだに、自宅の座敷も台所も寝間も一面に画虎を懸けることになって、近所の人たちもおどろき怪しみ、あの老人は虎に魅<sup>みこ</sup>まれたのだらうなどと言った。あまりの事に、その老兄も彼を責めた。

「お前はこんなものを好んでどうするのだ」

「いつもむしやくしやしてなりません。これを見ると、胸が少し落ちつくのです」

「それならば城内の薬屋に活きた虎が飼つてあるのを知っているのか」

「まだ知りません。どうぞ連れて行つて一度見せてください」

兄に頼んで一緒に連れて行つてもらったが、一度見たが最後、

ほとんど寢食を忘れて十日とおかあまりも眺め暮らしていた。その以来、毎月二、三回は城内に入つて、活きた虎を眺めているうちに、食い物も肉ばかりを好むようになった。肉も煮焼きをしたものは氣に入らず、もつぱら生なまの肉を啖くらつて、一食ごとに猪の頭や猪の股を梨なつめや棗なつめのように平らげるので、子や孫らはみな彼をおそれた。城内に入つて活き虎を見て帰ると、彼はいよいよ氣があらくなつて、子や孫らの顔を見ると、杖をもつて叩き立てた。

五代しよくの蜀しよくが国号を建てた翌年、彼は或る夜ひそかに村舎の門をぬけ出して、行くえ不明になった。そのうちに、往来の人がこんなことを伝えた。

「ゆうべ一頭の虎が城内に跳り込んだので、半日のあいだ城門を

開かなかつた。軍人らが城内に駈け付けて虎を射殺し、その肉を分配して食つてしまつた」

彼はいつまでも帰らず、又そのたよりも聞えなかつた。彼は虎に化したのである。遺族は虎の肉を食つた人びとをたずねて、幾塊かの骨片を貰つて来て、それを葬ることにした。

(茅亭客話)

## 靈鐘

陳述古ちんじゆつこが建州浦城けんぽうほじょう県の知事を勤めていた時、物を盗まれた

者があつたが、さてその犯人がわからなかつた。そこで、陳は欺

いて言った。

「かしこの廟には一つの鐘があつて、その靈れいげん驗あらたかである」  
その鐘を役所のうしろの建物に迎え移して、仮りにそれを祀まつつた。彼は大勢の囚人を牽ひき出して言い聞かせた。

「みんな暗い所でこの鐘を撫でてみる。盗みをしない者が撫でても音を立てない。盗みをした者が手を触るればたちまちに音を立てる」

陳は下役の者どもを率ひきいて荘重な祭事をおこなつた。それが済んで、鐘のまわりに帷とばりを垂れさせた。彼はひそかに命じて、鐘に墨を塗らせたのである。そこで、疑わしい囚人を一人ずつ呼び入れて鐘を撫でさせた。

出て来た者の手をあらためると、みな墨が付いていた。ただひとり黒くない手を持っている者があつたので、それを詰問きつもんすると果たして白状した。彼は鐘に声あるを恐れて、手を触れなかつたのである。

これは昔からの法で、小説にも出ている。

(夢溪筆談)



# 青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社文庫、光文社

1994（平成6）年4月20日初版1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。



# 中国怪奇小説集

異聞総録・其他

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>